

千葉県に所在するゴルフ場のローカルルールの実態について

藤 田 明 男

1. 緒 言

ゴルフ規則 33-8 で規定されているように、付属規則 I と IV に示されている方針と矛盾しないものであれば、地域的な異常な状態に対応するためそれぞれのコース独自のローカルルールを作ることが認められている。ただし、その際ゴルフ規則を無視したりしてはならないことが前提条例となる。つまり、規則 33-8 に基づいて認められるものと認められないものがあり、ローカルルールを定める場合に留意しなければならないのは、ゴルフ規則に基づいて科せられる罰は、ローカルルールにより免除できないことになっていることである。そこで本研究は、国内有数のゴルフ場を有する千葉県に所在するゴルフ場におけるローカルルールの実態についての基礎的資料を得る目的で調査を試みたものである。

2. 研究方法

- 1) 調査期間 平成18年10月～11月
- 2) 調査方法 千葉県に所在する全ゴルフ場にローカルルールの記載されたものを郵送依頼した。回収率は 65/98 (66.3%) であった。ただし、複数のコースを持っているゴルフ場があり、実際に回収されたローカルルール数は69であった。

3. 結果と考察

1) 境界と限界の明確化 (アウトオブバウンズ)

コースの境界を明確にするためにアウトオブバウンズ、いわゆる OB の明示が必要とされている。本研究で得られた資料では69例中68例で OB の明記があり、その明示の方法はすべて「白杭」であった。アウトオブバウンズの杭の色は特に定められていないが、千葉

県に限らず日本国内では「白杭」が一般的であると思われる。

また、本研究の資料ではないが、本来アウトオブバウンズはコースの境界線を定めるもので、コース敷地の外周に設置されるものであるが、国内ではアンプレアブルの処置をすべき場所が、アウトオブバウンズとされている場合が多く見られる。

2) ウォーターハザード

ウォーターハザードについてはゴルフ規則の用語の定義59の注1で「ウォーターハザードの範囲を決めるために使われる杭や線は、黄色でなければならない。ウォーターハザードの範囲を決めるために杭と線の両方が使われる場合は、杭はウォーターハザードであることを示し、線はそれによってそのウォーターハザードの限界を決める。」と定められている。

本研究で得られた資料では「記載なし」41例（59.8%）、「黄杭」のみが17例（24.6%）、「黄杭又は黄線」6例（8.7%）、「水面」3例（4.3%）、「黄杭又は水面」2例（2.9%）「黄線」のみ0例（0.0%）であった。

ラテラル・ウォーターハザードについては前出用語の定義27の注1で「ラテラル・ウォーターハザードの範囲を決めるために使われる杭や線は、赤色でなければならない。ラテラル・ウォーターハザードの範囲を決めるために杭と線の両方が使われる場合、杭はラテラル・ウォーターハザードであることを示し、線はそれによってそのラテラル・ウォーターハザードの限界を決める。」と明記されている。本研究では「赤杭」のみが31例（44.9%）、「赤杭または赤線」11例（15.9%）、「記載なし」10例（14.6%）、「水面」8例（11.6%）、「赤杭または水面」7例（10.1%）、「赤線または水面」1例（1.4%）、「赤杭または赤線または水面」1例（1.4%）、「赤線」のみ0例（0.0%）であった。

ドロップエリアの設置については「有」19例（27.5%）、「なし」50例（72.5%）であった。ドロップエリアの設置については、プレー進行上の理由で安易に設けるのではなく、規則で認められている範囲内にドロップする区域がない場合に限り、指定ドロップ区域を設定するローカルルールを採用することが重要である。

3) 一時的な状態

a) 過度の湿地やぬかるみ、不良なコースの状態とその保護

規則 25-2 に「スルーザグリーンの、芝草を短く刈ってある区域（フェアウェイの芝の

長さかそれより短く刈ってあるコースのすべての区域)で、球がその勢いで自ら地面に作った穴(ピッチマーク)にくい込んでいるときは、その球は罰なしに拾い上げて拭き、ドロップすることができる」。つまり、地面にくい込んでいる球の拾い上げは特定の区域に限定されているが、異常に地面が軟らかく、本来のゴルフプレーができないと判断され、スルーザグリーンで地面にくい込んでいる球について救済を受けることが妥当と考えられる場合には、次のようなローカルルールの採用が認められている。「スルーザグリーンで、地面(砂地の場所を除く)に自分でつくったピッチマークに球がくい込んでいるときは、その球は罰なしに拾い上げて拭き、ホールに近づかず、しかも球の止まっていた箇所に行きできるだけ近いところにドロップすることができる。ドロップの際、球はスルーザグリーンのコース上に直接落ちなければならない。」本研究で得られた資料では、「スルーザグリーンOK」は15例(21.7%)であった。

しかし、このローカルルールの採用は一時的なものであり、状況が回復次第すぐに撤回することが要求されており、スコアカードには記載されていないことが多い。

b)「プリファードライ」と「ウインタールール」

俗に言われている「6インチプレー OK」は、大雪、大雨、長雨または酷暑などの自然条件によって、生じた不良なコース状態やぬかるみがあるなどの悪条例が、特に冬季に、広範囲にわたって見られるような場合、コースを保護するため、あるいは本来のゴルフプレーを妨げないようにするために、救済を認める臨時のローカルルールとして作成することができる。ただし、そのローカルルールはスコアカードに印刷するべきではないとされている。今回の資料は、その大部分が各ゴルフ場のスコアカードに基づいたものであるため「プリファードライ」を明記したものは1例のみであった。しかし、このルールは一時的なものであるため、実際には臨時のローカルルールとして掲示されているものが多いと思われる。

またエアレーション作業を行ったコースでは、それによってできた穴からの救済を罰なしに許すことが妥当とされているが、このことについて記載されたものは1例もなかった。

4) 障害物

a) 障害物として扱えるような物件についての取り扱いの明示

本研究の資料では、動かさない障害物として次のようなものが明示されていた。

標示杭、樹木の支柱・支線、金網、道路、排水溝、固定席（ベンチ、腰掛）、水道スタンド、散水栓、散水設備、目土容器、日除け棚、非難小屋、吾妻屋、標識杭、切株、轍跡、給排施設、防球網、階段、リモコンカート軌道及び間、信号機及びその付属物、一時的堆積物、枕木、ヤード杭、停舎、マンホール、球洗、売店、花壇、マット、立て札、防寒用グリーンカバーシート、キャディ避難の金網。

ほとんどのコースで具体的に前出のようなものを「動かさない障害物」として明示しているが、例示せず、一括して「人工物は動かさない障害物とする」としている例も見受けられた。

b) 不可分である物として障害物でない構築物の告示

不可分である物、したがって障害物でない構築物の告示を「していない」42例（60.9%）、「している」27例（39.1%）であった。告示されているものとして、樹木保護のために施してある巻物（巻網など）、花壇、バンカーを構築している枕木及び法面保護のための枕木、コース内の置石、ティグランド及びバンカーの構築物、バンカー内の階段、樹木の支柱などがあった。ただし、花壇については花木保護のため動かさない障害物として扱っている場合が圧倒的に多かった。

c) バンカー内の石

付属規則 I・5・b にバンカー内の石を「動かせる障害物」とすることによって、バンカー内の石を取り除くことができるローカルルールが2005年より認められている。定義上、石はルースインペディメントである。したがって、プレーヤーの球がハザード内にあるときは、ハザードに接している石に触れたり、それを動かしてはならない（規則 13-4）。しかしながら、バンカー内の石は、時として、プレーヤー自身だけでなく他のプレーヤーにとっても危険を意味することがある。のみならず、バンカー内の石はゴルフゲーム本来のプレーを妨げている可能性がある。バンカー内の石を拾い上げることを許すほうが妥当と思われる場合には、付属規則 I の [B] 4 では、規則 24-1 を適用し、バンカー内の石は動かせる障害物とするローカルルールの採用を勧めている。しかし、本研究の資料では、わずか1例のみであった。石を取り除く際の砂質のテスト行為、量が多い場合の取り除く行為によるプレーの遅延などが採用されていない理由として考えられるが、不採用に関する追研究が必要とされる。

d) 道路・通路

付属規則 I (A) 5-c で道路や通路の入口の表面と側面はコースと不可分の部分とすることの告示が認められているが、そのような告示をしているものは1例もなかった。大部分が人工の障害物として取り扱っており規則 24-2b 救済が受けれるようになっている。

e) グリーンに近接する動かさない障害物

規則 24-2 は動かさない障害物による障害からの罰なしの救済について規定しているが、グリーン以外では、プレーの線上に障害物がかかっている場合、それ自体、規則 24 に言うところの障害には当たらないとも規定している。しかし、付属規則 I (B) 5 はグリーンのエプロンの芝生が短く刈り込んであって、グリーンを少し外れた所からでも、パターを使いたくなるようなコースも見受けられる。そのような場合に、エプロンにある動かさない障害物が、ゴルフ本来のプレーの妨げになることがある。このような場合、動かさない障害物の介在による障害からの罰なしの救済を追加規定する次のようなローカルルールの導入を妥当としている。「動かさない障害物による障害からの救済はゴルフ規則 24-2 により受けることができる。加えて、球がグリーン外ハザードでないところにある場合で、動かさない障害物が (イ) グリーン上かまたはグリーンから 2 クラブレンジス以内にあり、(ロ) 球からも 2 クラブレンジスの範囲以内で、しかも (ハ) 球とホールの間のプレーの線上にかかっているときは、プレーヤーは次のような救済を受けることができる。その球は拾い上げて、(a) ホールに近づかずに、(b) 障害物の介在が避けられる、(c) ハザード内でもグリーン上でもない場所で、球のあった箇所に最も近い所にドロップしなければならない。拾い上げた球はふくことができる。」さらに、このローカルルールに基づく救済は「球がグリーン上にあり、グリーンから 2 クラブレンジス以内にある動かさない障害物が、プレーヤーのパットの線上にかかる場合にも適用される。この場合、プレーヤーは次のような救済を受けることができる。その球は拾い上げて、(a) ホールに近づかずに、(b) 障害物の介在が避けられる、(c) ハザード内でもグリーン上でもない場所で、球のあった箇所に最も近い所にドロップしなければならない。拾い上げた球はふくことができる。」この救済を規定しているコースはわずか 2 例 (2.9%) のみであった。67 例 (97.1%) のコースで採用されていなかった。

主たる不採用の理由は、そのような障害物が存在しないということが考えられる。

f) 若木などの保護

付属規則 I (B) 2 で若木に与える損傷を避けたいときには、次のようなローカルルールの採用を勧めている。「識別できるように・・・してある若木の保護：若木がプレーヤーのスタンスや意図するスイングの区域の妨げとなる場合、その球は、罰なしに拾い上げ、ゴルフ規則 24-2b（動かさない障害物）の規定に従ってドロップしなければならない。玉がウォーターハザード内にあるときは、プレーヤーはその球を拾い上げ、救済のニヤレストポイントをそのウォーターハザード内に決めなければならないという点と、球はウォーターハザード内にドロップしなければならないという点を除き、他はすべて規則 24-2b (i) に従ってドロップしなければならないが、規則26により処置することもできる。このローカルルールにより拾い上げた球はふくことができる。」。しかし、本研究の資料ではこのローカルルールの採用は 1 例もなかった。

理由としては「若木」の定義上の不明確さやプレーに支障をきたすほどの若木があまり存在しないということが考えられる。

5) 修理地

ゴルフ規則の用語の定義 22 でコース内の次の場所を「修理地」としている。

(イ) 委員会の支持により修理地の標示がしてある場所。

(ロ) 委員会から権限を与えられている人によって修理地と宣言された場所。

また修理地の標示をしていない場合でも、次のものは修理地に含まれる。

(イ) 他に移す目的で積み上げてある物

(ロ) グリーンキーパーが作った穴

ゼネラルルールでは、修理地でのプレーはプレーヤーに任せられる（あるがままでのプレーか修理地外にドロップ）が、委員会がコース内の特定区域を保護したいときは、その区域を修理地にして、その区域でのプレーを禁止することができる。つまり、その区域をプレー禁止の修理地として、その区域がプレーヤーのスタンスや意図するスイングの区域の妨げになる場合には、プレーヤーはゴルフ規則25-1による救済を受けなければならない。本研究での資料では修理地でのプレーの禁止を採用しているのは13例（18.9%）、記載なしは56例（81.1%）であった。

修理地の区域からのプレーを禁止する場合、そこからの救済がプレーにとってより有効であるかを検討することが重要であると思われる。救済の場所が木立やその他の障害でプ

プレーが困難になる場合、通常のプレーが可能な区域からのプレーよりも不利益を与え、公平さを欠くことになるからである。ただ単に区域の保護という観点で安易にプレー禁止とするのは問題があると思われる。

修理地を示す標示は「青杭または白線」50例（72.5%）、「青杭および白線」14例（20.3%）、「記載なし」4例（5.8%）、「青杭のみ」1例（1.4%）であった。

6) 特設ティの設置

日本独特のルールとして知られている、特設ティ（いわゆる前進4打ティ）を設置しているコースは25例（36.2%）、「記載なし」は44例（63.8%）であったが、実際にはかなりのコースでスコアカードには記載せず、コース上に特設ティを設置しているのが現状だと思われる。しかし、プレー進行上の理由でよく見受けられる池越えや谷越えのホールでショットが越えなかった場合、特設ティでプレーさせる設定があるが、ゴルフの本質やプレーの継続性をも失うものであり、正常化されるものではないという指摘もある。JGAは「JGA DECISIONS 2006」の中で、特設ティからの第4打でプレーすることを要求するローカルルールは認められないとしている。

7) ワンペナルティ杭（トラ杭・1ペナ杭）の設置

隣接するホールに球が行った場合、ワンペナルティを払って現にプレーしているコースに戻す処置がとられる場合がある。この処置をとっているコースは20例（29.0%）、「設置なし」は49例（71.0%）であった。処置について最も多かったのは、「ボールが静止している地点から元のホールに戻してドロップ」13例（65.0%）。次いで「横切った地点からプレーコースに戻しドロップ」5例（25.0%）、「ドロップエリア」2例（10.0%）であった。この処置もプレー進行上あるいは危険防止の理由と考えられるが、安易に設置することはゴルフの本質を損なうものであると思われる。事実、JGAは、前出「JGA DECISIONS 2006」の中で「杭を越えた球を1打罰のもとにプレー中のホールに戻してプレーすることを要求するローカルルール」を認められないものとしている。

ワンペナルティ杭の標記には「黄黒杭」、「黄黒縞杭」、「縞杭」、「黄色班杭」、「黄色縞杭」、「班杭」等が使用されている。

8) グリーン上の使用クラブ

グリーン上での使用クラブについて「記載なし」43例（62.3%）、「パターのみ」、24例（34.8%）、「パターの破損紛失の場合限定なし」2例（2.9%）であった。ゼネラルルールではグリーン上での使用クラブの制限はないが、グリーン保護のため使用クラブ制限をしているコースは、スコアカードに記載せず臨時ローカルルールで規制しているのが現状である。JGAは、グリーン上でパター以外のクラブを禁止するローカルルールは認められないとしている。

9) 終了ホールグリーンでの練習

終了したばかりのグリーンでの練習は「禁止」24例（34.8%）、「記載なし」45例（65.2%）であった。規則7-2(a)でラウンド中の練習は原則として許されていないが、例外としてプレーヤーは、プレーし終えたばかりのホールのグリーンやその近くでパッティングやチップングの練習することが許されている。ただし、ローカルルールで「プレーを終えたばかりのグリーン上やその近くで練習することの禁止」を制定することも認められている（規則7の注2）。その理由としてグリーン保護やプレー進行の遅延を防ぐことなどが考えられる。

4. 今後の課題

今回の研究では、スコアカードやクラブ手帳などに記載されているものについての資料のみの分析であったが、それらに記載されていない臨時のローカルルールについても検討する必要があると思われる。

参考文献

(財)日本ゴルフ協会『ゴルフ規則2006年度版』、(財)日本ゴルフ協会、2006年

(財)日本ゴルフ協会『JGA裁定 JGA DECISIONS 2006』、(財)日本ゴルフ協会、2006年

(財)日本ゴルフ協会『ゴルフ規則裁定集2006-2007』、(財)日本ゴルフ協会、2006年

(財)日本ゴルフ協会訳『競技運営ガイドンス』、(財)日本ゴルフ協会、2005年

(社)日本ゴルフトーナメント振興協会『GTPA現代ゴルフコース論』、(社)日本ゴルフトー

千葉県に所在するゴルフ場のローカルルールの実態について

ナメント振興協会、2005年

R & A ルールズリミテッド編 (財)日本ゴルフ協会訳『図説ゴルフ規則2006年度版』、(財)日本
ゴルフ協会、2006年